第三種郵便物認可

北アルプスで山岳救助のボランティアをする主人公・島崎三歩を通して山の素晴らしさを描く漫画「岳　みんなの山」。松本、小諸など物語の舞台のほとんどは県内で、今年創設された「マンガ大賞2008」を受賞するなど、多くの人々の心をとらえている。山を訪れる人々をおおらかな優しさで包み込む三歩の生みの親、石塚真一さんに、作品の誕生秘話などを聞いた。

漫画「岳」の作者・石塚真一さんに聞く

クライマーの心 描きたい

「岳」の一場面。遭難者を背負う三歩は「良く頑張った」と声をかける　©小学館

島崎三歩は小諸市出身。海外を含めた豊富な登山経験と知識を持ち、北アルプス山中でテントに寝泊まりしながら、日々愛する山を駆け巡る。老若男女、それぞれの人生を背負って山を訪れる人々は、時に美しい山に癒やされ、時に険しく厳しい山の遭難者となるが、三歩はそんな人々と真正面から向き合う。「三歩は、クライマーのヒーローとして、自分がこれまでに出会ってきた〝いいヤツ〟を寄せ集めて描いています」

小諸市は会社員だった父親が赴任していたことがあり、石塚さん自身もたびたび訪れた好きな土地。物語によく出てくる松本市は親友のふるさと。「長野県はとても愛着がある」と言う。「岳」の舞台はそんな理由で設定された。

「三歩にはクライマーのヒーローとして、山の魅力を伝えてほしい」と語る石塚真一さん

いしづか・しんいち　1971年茨城県生まれ。米国留学後、サラリーマンを経て、独学で漫画家に。「岳　みんなの山」は初の連載作。2003年から「ビックコミックオリジナル」（小学館）に連載中で、単行本は7巻まで発売中。3月、漫画愛好者らによって選ばれる「マンガ大賞2008」を受賞した。

主人公は北アの山岳救助ボランティア

自らの死生観 根底に

主人公の姓は「島崎藤村」にちなんで、名は「散歩」というニュアンスと、心に残っていた絵本に出てくる山の大男「三コ」とを掛けて、名付けたという。

二十二歳の時、米国に留学し、気象学を学んだ石塚さん。その時に、親友となった米国人のルームメートにいきなり連れて行かれたアイスクライミングをきっかけに、山との付き合いが始まったという。「そいつが、面白いヤツで、物事に頓着しない。いつでも笑っていて、肯定的な言葉しか発しなかった。（遭難しかけて）生命が危ない時でも、二人で笑っていた」と振り返る。

日本の「登山」と、米国の「クライミング」は、随分イメージが違うことに驚いた。「日本では山は神聖で、近づき難い印象しか伝わってこなかったが、（米国の）クライマーは、苦しい局面でも、いつも笑っている。さりげないファッションも含め、かっこいいスポーツ。山が近く感じるようになった」

留学当初から、日本に何か土産を持ち帰りたいと考えていたという。「（滞在した）五年間、毎日のように登った山の面白さと、山と付き合う中で出会ったクライマーのハート（心）の大きさかなと思いました」。それが、漫画を描く原動力となり、テーマにもなった。

「岳」では、岩場での滑落など死を伴う遭難の場面がリアルに描写されている。三歩に背負われたまま搬送途中で息を引き取る遭難者。三歩は彼らに「出会えてよかった。良く頑張った」と声をかける。生存者、家族、それぞれの人生に直面した時、淡々と、しかし包み込むように受け止める三歩の人間を愛する心と懐の深さがストーリーを貫く。

その根底には、石塚さんが、自らの経験を通じて培った死生観があるようだ。友人や父親の死と向き合い、自分自身や家族の心模様が見えてきたという。大きな悲しみは、急速に人を学びへとも導く。「どうあっても生きなくてはならない現実もある。尊い命が残してくれた財産を思う時、死は決して無駄でない」と実感した。「良いことばかりが、良いのではなく、悲しい体験が大きな何かを生み出すことは多い」

一方で、山は美しく、子ども、若者から年配者まで、心が満たされる魅力を秘めたものだ。石塚さんは三歩を通じて、山のファンを増やしたいと願う。

三歩はこれからどこへ行くのか――。石塚さん自身も、わからない。「三歩は自分一人でできているものではない。出会いが三歩を生み出している。感謝して、何よりまず、自分が感動できるものを目指し、一本一本に全力を尽くすだけです」

土曜エンタメ　Music

信州クラシックシーン

11日と6月、長野市内でサロンコンサートなど開催

ピアニスト　奥村（おくむら）美佳（みか）さん

ショパンの愛を運びたい

「ピアノの詩人」と称されるフレデリック・ショパン（1810〜49年）の生誕200周年を迎えた今年、世界各地で記念イベントが開かれている。ショパンに魅せられたピアニストの一人、長野市の奥村美佳さん（日本ショパン協会長野支部長）がコンサートや催しを企画して6年目。今年も、11日と6月に長野市内でサロンコンサートなどを開く。

ショパンの母国ポーランドの首都ワルシャワにも拠点を持ち、日本と行き来して25年余。奥村さんはコンサートの準備のために1月末から約2カ月、渡欧した。ショパンの誕生日とされる3月1日まで8日間、夜通しで行われたノンストップコンサートに出演したり、ショパンが恋人ジョルジュ・サンドと過ごしたフランス・ノアンを訪ねたりした。「肌で感じるショパンの愛と風を運びたい」と願い、足跡をたどるなど地道な活動を繰り広げている。

シンプルで美しいメロディーの中に切なさや喜び、苦悩などがストレートかつ繊細に表現され、じわじわと細胞に染み込んでくるようなショパンの作品。肺結核の持病や39歳で病死した生涯から「弱々しい」イメージが強調されがちだが、奥村さんは「それはごくわずかな一面。天真らんまんで愛が深く、強い魂の持ち主」と、ショパンを知るほどに痛感している。

ショパンが活躍した19世紀前半は、楽器や技術が急激に変化した。演奏する舞台も王侯貴族の小さなサロンから大きなホールでの「演奏会」という形式への移行期だった。「ショパンの奏法は耳を澄まさないと聞こえないような音楽で、当時、大きな音で演奏する華やかなスタイルがもてはやされ始めたため、批判もされた」という。

奥村さんは15年前、ワルシャワの古書店でショパンの日記を発見。「人がどう思おうと知ったことじゃない」というフレーズが原語で多く記されていた。

「自分の音楽と使命を知り、時代に流されず相当な信念を持って純粋に闘った強さに感銘を受けました」と奥村さん。自身の生き方にショパンの反骨精神を重ねているようだ。

奥村さんの演奏には、音楽のフレーズの中にある「間」がより濃く感じられる。師事するポーランド国立ショパン音楽院教授のカジミエーシュ・ギェルジョード氏が問い続ける「ピアノを通して語ること、それが美しいかどうか」を追求する中で、当時のショパンの音におのずと近づいているのかもしれない。

ショパンは日本人にとりわけ愛されている作曲家だ。「メロディーが簡単。日本庭園の風景のようなシンプルな中に何かを感じる繊細さが、日本文化と共通し、好まれているのではないでしょうか」

ショパンの持つ世界に癒やされ、その神髄に果敢に迫り続けるピアニストのひと味違った世界が、節目の年のコンサートで楽しめそうだ。

（中山　英子）

2月、ポーランド・ワルシャワの教会で行われたショパンのコンサートで演奏するピアニストの奥村美佳さん

公演案内

11日の「ショパン生誕200周年記念　奥村美佳サロンコンサート」は、長野市のホテル・メトロポリタン長野で午後2時開演。マズルカ、ワルツ、バラードほかよく知られる曲の数々を披露する。入場料4千円。

6月11日には同市の県民文化会館（ホクト文化ホール）で、奥村さんと同様にカジミエーシュ・ギェルジョード氏に学ぶ坂田朋優さん（北海道）と共に「ショパン　2台のピアノデュオコンサート」を開催。2台のピアノのために作曲されたロンドをはじめ、2台用編曲4手連弾を織り交ぜた普段聞けない多彩なショパンの作品を集める。午後7時開演。全席自由で3千円。

両公演とも問い合わせはショパン協会長野支部（☎026・232・6032）。

母国の聖歌挟み込んだ曲も

ショパンの母国ポーランドはキリスト教・カトリックの国で、現在でも国民の約95％が信者だ。18世紀末には3度にわたり隣国に分割され、第1次大戦終了までの123年間、世界地図から姿を消した歴史がある。

「厳しい歴史を生き抜いた精神力と謙虚さは、神を愛する心から生まれていると感じます」（奥村さん）

ショパン自身の信仰はあまり語られていないが、ウィーンに単独で演奏活動に出掛けていた若き日に着手したスケルツォ1番は、ポーランドのクリスマス聖歌の一部が中心部に挟み込まれている。既存のメロディーを引用して作曲した数少ない作品だ。

奥村さんによると、「ポーランドの敵対国だったロシアがウィーンに侵攻し、ショパン自身、活動ができなかった。自分の無力さを感じ、教会で泣き伏せって過ごしたクリスマスの体験が影響している」という。

信州 クラシックシーン

30日 諏訪の「ホルンフェスティバル in 信州」に出演

ホルン奏者 水野（みずの） 信行（のぶゆき）さん

「知的な楽器」迫力間近に

　柔らかい響きと深い音色が特徴で、金管楽器の中で最も難関とされるホルン。今月30日、日本を代表するホルン奏者らが一堂に会する「ホルンフェスティバルin信州」が諏訪市で開かれる。前日の29日には諏訪交響楽団の定期演奏会（岡谷市）で双方が共演し、「アルプス交響曲」などを披露する。開催を控え、ドイツ・バンベルク交響楽団、「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」などで長年首席奏者を務めた水野信行さん（東京音大教授、須坂市出身）にホルンの魅力を聞いた。

　水野さんは「木管、金管の中で最も音域が広い。指づかいだけでなく、音をイメージしながら呼吸で音を当てていく」と説明。「ミスをする確率が高い」と難しさを語る。

　弦楽器が弓の動きで音を動かすのに対し、「ホルンは空気の流れを使うので、呼吸とそれを支える腹筋の活用、耳と頭（考える力）が大切。木管楽器のリードの役割を果たしているのが唇で、振動させて音を出す」。

　内臓も含め体全体を駆使しなくてはならない。「2時間の本番を持たせるには、相当の体力が必要。唇や頭が疲れてきても、腹筋で支える力が残っていると、最後までいい演奏ができる」

　歌曲を聴いているような、水野さんの優雅な演奏は、武道の達人を思わせるしなやかで粘り強い肉体があってこそ。「安定感のある姿勢を保つことで、体内の空気の流れがうまくでき、同じ音を長く延ばしたり、クレッシェンド（音を次第に強くする）などが可能になる」

　音の微妙な違いを常に感じながら演奏するため、判断力も重要だ。「ホルン吹きは考えることが多いせいか、本番で失敗してしまうケースもよくある。挫折してやめる人も多い」。水野さん自身もバンベルクに在籍した40代のころ、1年半に及ぶスランプを経験。大きな演奏会を辞退したことが忘れられない。

　高音から低音まで奏でられることから、ホルンだけで合奏できるのも魅力。ホルンのために作られた名曲もあり、演奏家同士のつながりが他の楽器に比べて強い。国内の演奏家の多くは日本ホルン協会（樋口哲生会長）に属し、普及のために積極的に活動している。県内からは水野さんのほか、丸山勉さん、山岸博さん（ともに上田市出身）ら、世界的に活躍する奏者が育った。今回のフェスティバルにも出演する。

　諏訪響と共演するR・シュトラウス作の「アルプス交響曲」はホルンが活躍する大曲だ。「知的な楽器」ともいわれるホルンの迫力を間近に感じられる貴重な機会になる。

（中山　英子）

ホルンの普及に力を入れる、左から丸山勉さん、樋口哲生さん、水野信行さん

アルプス交響曲　ドイツの後期ロマン派作曲家リヒャルト・シュトラウスの大曲。シュトラウス自身が少年時代、アルプスに登山した日の出から下山までの一日を描いた交響曲。ホルンが20本出演。うち12本は、ステージ裏で遠くから聞こえてくるアルプホルンや山びこを表現する。諏訪響の常任指揮者で国立音大でホルンを専攻した浜一（はじめ）さんと、日本フィルハーモニー交響楽団客演首席奏者などを務める丸山勉さんが意気投合し、県内での公演が実現した。

公演案内

　ホルン奏者のレベルアップと普及を目的に開く「ホルンフェスティバル」は、諏訪市駅前市民会館で30日午後1時開演。若手の団体や県内出身音大生によるアンサンブルのほか、ドイツ・ドレスデンのホルン奏者が作曲した作品を水野信行さんが披露。諏訪響ともモーツァルトのホルン協奏曲などを演奏する。参加者にはホルン持参を呼び掛け、大合奏も予定。一般1500円、大学生以下500円。

　午前11時からは守山光三東京芸大教授によるマスタークラスを開く。問い合わせは日本ホルン協会事務局（☎03・3943・6677）。

　85周年を迎える諏訪響の第148回定期演奏会は、岡谷市のカノラホールで29日午後6時半開演。日本ホルン協会のプロ奏者らが出演し、「アルプス交響曲」のほか、シューマンの「コンチェルト・シュトゥック」などを披露する。一般千円、高校生以下500円。問い合わせは小口さん（☎090・8723・0513）。同6時から会場ロビーでアルプホルンの演奏がある。

日本の音と前衛の融合

鳥養潮の音世界 魅力を語る

日本古来の"音"に精通し、そこに根差しながらも、絶えず前衛的な現代音楽を生み出している作曲家・鳥養潮＝米国ニューヨーク在住、松本市出身。ほかに例を見ない個性的な作品の魅力は、活動拠点のニューヨークをはじめ、国際的にも高く評価されている。三十日に長野市内で行われる演奏会「鳥養潮の音楽 千年の音・聲（こえ）」（信濃毎日新聞創刊百三十年記念）を前に、かねてから鳥養の音楽世界に注目してきた二人がその魅力を語った。

（インタビュー・中山 英子記者）

映画監督 篠田 正浩

激しい熱情と理性一体

「私は今『日本の始まりはどうだったのか』ということに興味がある。鳥養さんの音楽にも通じるものでしょう」と話す篠田正浩さん

「新しい映画を作るために、私は常に最先端の音を聴き続けてきた」。篠田さんは映画監督という仕事と音楽の関係を、そんなふうに表現する。その耳に入ってきたのが八〇年代の鳥養潮の代表作「シャマ（SHAMA）」だった。

この作品では、最新のコンピューター・プログラムが、三絃を演奏する鳥養の"相手役"を務めるという構成。篠田さんは「斬新で前衛的でありながら、音の構成が気まぐれでない」と高く評価し、「すごい才能が現れたなあ」と、衝撃を受けたという。

身体に入り込んできて魂を揺さぶる音、その集積。これらは決して偶然の産物ではない—と、篠田さんは感じた。物質文明主導の現代社会がおろそかにしがちだった「身体性」というものを鳥養は十分に認識している、とも。身体の営みである呼吸や感覚を楽器まかせにするのではなく、演奏者の身体と楽器が融合すること。鳥養のそうした狙いは一曲ごとに違った形で現れてくる。篠田さんは「まるでマジックを見るように驚嘆した」という。

【しのだ・まさひろ】映画監督。1931年、岐阜県生まれ。代表作に「心中天網島」「梟の城」「写楽」など。監督活動に終止符を打った後は母校の早稲田大学などで芸能史などを研究したいという。

「音楽でも映画でも、作品を作る時は『今』という時に対し、必ず視点を獲得する必要がある。それに答えを出さないと作品にならない。それが前衛の義務でもある」と篠田さん。「鳥養さんは古代の楽器を復元したり、コンピューターがつくる音を使いこなしたり、音をさまざまな角度から取り上げ、予知不可能なことをする。激しく狂おしいほどのパッション（熱情）を感じさせる一方で、ものすごく理性的でもある。知的な好奇心もくすぐられます」

鳥養の音楽は一般的に「分かりにくい」とされがちだ。その分かりにくさは、近代以降の音楽を規定してきた「ドレミファ…」という西洋音楽の平均律の概念にあえてとらわれず、音の根源へと時をさかのぼる鳥養の姿勢にも起因しそうだ。

音楽を支配してきたとされる音階も、人類の歴史を振り返ってみれば、限られた地域の限られた時間にすぎない。「最近はアジア、アフリカなど世界各地、各民族によるワールドミュージックという分野が注目されていますが、これらは音階に支配されていない。そういう音楽が今の人にずいぶん浸透してきた。だから、鳥養さんの音楽は聴きやすく、それだけでなく心のどこかを揺さぶるように受け止められているのではないか」

篠田さん自身、映画を通じて武満徹、池辺晋一郎ら現代音楽の作曲家と多くの仕事をしてきた。「日本には、現代音楽は映画の中でしか聴けないような状況がある。彼らは孤立しているように見えても、純粋に自らの作品で勝負している貴重な存在です」と言う。

来夏に公開される「スパイ・ゾルゲ」を最後に監督活動にピリオドを打つという篠田さん。「だれのものとも比較できない自立した精神と感性を持っている鳥養さんと、一度は一緒に仕事をしてみたかったですね」と話した。

写真集「 Portraits 」より、ニューヨークの鳥養潮（撮影・松本路子）

写真家 松本 路子

五感を解放 再生への力

「ニューヨークで評価されるのは並大抵ではない。それを成し遂げている鳥養さんは相当なもの」と話す松本路子さん

松本さんには、十数年にわたり、女性アーティストを中心に世界の芸術家の肖像を収めた代表作の写真集「Portraits」があり、鳥養潮もその中に登場する＝写真参照。何ともアンニュイな雰囲気を漂わせ、その中にもある種の強さをうかがわせる、一九八七年、ニューヨークでのショットだ。

松本さんがアーティストを撮り続けてきたことで共通して言えるのは、自分の作品への確信を持っている人ほど像がぶれないことだという。しかも、被写体として撮られることに集中するまでの時間が速く、集中度も深い。そして集中の極みに達した時、アーティストたちの肩の力がふっと抜け、無心でそこに在るのが分かる。その瞬間、松本さんはシャッターを切る。

「鳥養さんの集中力も素晴らしかった。雑念のないスピリチュアル（精神的）な存在で、透明感を感じました」

松本さんは、鳥養が東京から米国ニューヨークに拠点を移す三年前の一九八三年に、撮影を通じて出会った。その年、鳥養の二つの作品発表会に足を運んだ。一つでは、正倉院に収められているハープに似た楽器「箜篌（くご）」を鳥養自らが復元し、演奏した。もう一つは、空き缶や鍋、フライパンなどを用いて音を出すパフォーマンスだった。

「古代と超現代、二つのコントラストが画期的で、強烈でした」と松本さんは振り返る。「彼女は、音に対してどう向き合うか—という自分の姿勢を、しっかり持っている。ニューヨークは彼女に合っているだろう」と感じた。

その予感は的中した。「一年で帰る」と言っていた渡米だったが、鳥養は水を得た魚のように活動を始める。松本さんはハーレムの教会で鳥養の作品に再会し、熟成されゆく彼女の世界に魂の深さを実感したという。

鳥養には幼少時から親しんだ邦楽があり、その上に西洋音楽、アジアの音楽、そして現代音楽。すべてのジャンルを行き交い、自ら楽器を弾きこなすのが鳥養の特長だ。

「作品から感じられるオリジナリティーは、西洋人のだれもが作り得なかったもの。物質文化が先導し、現代人が失ってしまった太古のエネルギーをよみがえらせる力を、鳥養さんには感じます」と松本さん。

世の中が豊かになっていくのとは逆に、やせ衰えていくかのような、現代人の魂。この人間の危機を肉体で直感し、そこに潤いを与えるのがアーティストの役割だと、松本さんは考える。

鳥養の音楽にはそれがあり、さらには「再生へのエネルギーに満ちた、本来の意味の癒やし」さえ秘めている、とも。「アバンギャルド（前衛的）＝『わかりにくい』という誤解があるけれど、現代に欠けている何かを補う力を示す前衛芸術は、五感を解放し、心のときめきや純化をもたらす。鳥養さんの音楽は、ゆったり楽しめる音です」

女性アーティストはその直感力に優れているという。「世の女性が元気なのは、自然のサイクルと直結し、豊かな宇宙のエネルギーを常に感じているからかも」

【まつもと・みちこ】写真家。1950年、静岡県生まれ。70年代から、オノ・ヨーコら女性アーティストを中心とした肖像写真を手掛け、欧米や日本で個展、グループ展を多数開催。最近では内外のダンサーを撮った写真集「Dancers—エロスの肖像」（講談社）を出版。

鳥養潮の音楽 30日に長野で

「音」と「聲」の2部構成

「鳥養潮の音楽 千年の音・聲」は、三十日午後六時半開演で、長野市の県民文化会館中ホールで開かれる。信毎創刊百三十年と、鳥養の第五回信毎選賞受賞の記念演奏会。

コンサートは「音」と「聲」の二部構成。第一部の「音」は、西潟昭子の三絃（さんげん）ソロ「UTAⅢ」、後藤すみ子の箏と北原篁山の尺八による「縒曲—YORIUTA」など。第二部の「聲」では、天台宗、真言宗の僧りょらによる新作声明（しょうみょう）「存亡の秋（とき）」を披露する。

チケットは、前売り4500円、当日5000円。問い合わせは信濃毎日新聞社事業部（☎026・236・3399）へ。

【とりかい・うしお】現代音楽作曲家。1952年、松本市生まれ。松本深志高校、慶応大経済学部を卒業後、86年にロックフェラー財団の招きで渡米。幼少時から親しんでいた邦楽やピアノなど、さまざまな楽器を用いて独自の音楽世界を作り上げている。CDに「GO WHERE?」「阿吽の音AUN」など。第5回信毎選賞受賞。

芸能